

波瀾 剛著

『越境のアヴァンギャルド』

疋 田 雅 昭

歴史性を明らかにする……。最近では、文学研究においても常套句となりつつある言葉だが、我々が明らかにしようとする「歴史性」とは、多くの場合、ある概念を示す「言葉」である。

ある言葉が固定化するまでの過程。同じ言葉でも今では全く忘れられている意味。そして、その過程における大きな切点。そのパラダイムチェンジをめぐる様々な力学。「歴史性」の議論の対象となるチームは、どこまでいっても果てしない。そのくせ、細かく探れば拡散し、大きく捉えれば同じ様な枠組みに陥る。ミクロな抵抗は、ますます細分化してゆき、大きな物語は、深い伝統を有すると思えたものがつい最近捏造されたに過ぎないというおきまりの形を反復する。

「アヴァンギャルド」という言葉をめ

ぐる本書の目論見にも、これと同じような欲望があるのは間違いないだろう。だが、本書の手續きにおいて看過してはならないのは、タイトルにもある「越境」である。この「越境」が、ややもすると凡庸なラインをたどりがちな「歴史性」のお話にある種のダイナミズムを与えている。

この「越境」は、大きくは三つに分けられる。まず、映画、文学、美術、写真など様々な「ジャンル」間の「越境」である。これは、アヴァンギャルドやモダニズムを研究する視点としてはむしろ必須のものである。言うまでもないが、本書で扱われているものは従来あまり着目されなかつた作品も多い。

次の「越境」は「時代」である。日本のアヴァンギャルドの研究は、多くの場

合戦前の動向に集中しがちなきらいがある。それは、海外の思潮をいかに受容したかという視点を有する以上、ある程度は仕方ないことでもあるのだが、本書は戦前と戦後の連続性と、それを前提とした切断の諸側面を描いている。(なお、ここで言う「戦前」「戦後」とは、特に著者が強調している時代区分ではない。第二次世界大戦を境界とした通常のそれをさしている。昭和の日本における思潮の受容、その概念規定の揺らぎを問題にしている以上、「接続」であろうと「切断」であろうと、このチームで本書を語ることに問題はないと思われる。)

そして、最後の「越境」が「場所」である。前述した様に、日本のアヴァンギャルドの研究では、本場の思潮が如何に受容され、日本独自の様相に変化して来たかという視点を避けることは難しい。だから、そこに「場所」(それに伴う時間)の「越境」があるのは、当然に思われるかもしれない。しかし、そこで通常描かれる場所とは、ロシア、ヨーロッパ、欧米と日本という「場所」であり、それは、ある意味、オリエンタリズムとオク

シデンタリズムの固定化した状況を再確認するとう、おきまりのパターンの追認であることも多い。

だが、本書の主たる「場所」とはアジアである。アヴァンギャルドが、満州をはじめとするいわゆる「外地」を舞台として「内地」、またはヨーロッパへと「越境」してゆく視点は、実は、サイードの単なる反復には終わらない可能性を秘めている。そこで描かれるのは、容易に反転しうる両者の関係、オリエンタリズムとオクシデンタリズムという区分を無効にしてしまうかもしれない、ダイナミックな関係である。アヴァンギャルドやモダニズムの「本場」であるヨーロッパや欧米が日本から見ると当然「外」であったとしても、日本という「内地」が生み出した「外地」とは、日本にとって「外」なのか「内」なのか。「アヴァンギャルド」という用語の「歴史性」を素描しようとする試みにおいて、本書を他と分かちつ点は、ここにあると言つて間違いないだろう。議論の詳しい様相は、私の拙い要約などよりも、ぜひ本書を御一読されたいと思う。

今でこそ安定した評価を持つよう思われる安部公房をめぐる評価は、当初複雑な様相を呈していた。本書で安部公房を批評する概念は、もちろん「アヴァンギャルド」であるが、この「アヴァンギャルド」という言葉が戦前から持っていた、政治的な側面と、芸術的な側面という二面性が、この時代の批評の力学と結びついた形で安部文学を取り囲んでいたのだ。

そういつた意味で、本書の魅力としては、第III部における安部公房をめぐる議論をあげなくてはならないのだろうが、その前に私は第II部における日本とアジアにおける都市の関係と人の関係が、そのままアヴァンギャルドの作品の構造として映し出される諸相を描いた論考について述べたいと思う。それは、先にも述べたアヴァンギャルド研究と地政学研究との出逢い、それもアジアにおける邂逅が興味深かったというだけではない。

ここで扱われるのはハルビンである。周知の通り、戦前のアジアにおいては、東京よりも上海やハルビンの方が、様々な芸術思潮との出会いを享受しうる都市

であった。西洋の潮流は、東京よりも先にこれらの都市でアジアに出逢ったと言つてもよい。だが、ここで看過してはならないのは、これらの都市が戦前に置かれていた政治的状况である。政治的には日本の強い影響下にありながら、文化的には日本が求める欧米諸国の芸術潮流をはるかに先んじて享受している。その二面性が、「外地」におけるアヴァンギャルド芸術の諸相に注目することによつて浮かび上がってくる点は、非常に示唆に富んでいる。

しかし、それ以上に興味深かったのが、そこで具体的な作品の内実に触れている点である。アヴァンギャルド研究は、多くの場合、生み出された作品そのものについては考察の対象になりにくい。それはもちろん、解釈自体が拒否された芸術であるからなのだ。アヴァンギャルドは既存の歴史が構築して来たものを強く意識するが故に、実は、歴史との関係から自由ではあり得ない。そこで生み出された芸術も同様に、誰が如何なる関係性に対峙しようとしていたのか、という視点を外して考えることは困難である。

その意味では、ある程度まで独立したテクスト分析が可能な既存の芸術に対し、作家論的な側面が意外にも強く、結果的に、思いの外、作家、作家たちの運動、活動をめぐる実証的な世界となる。こう言つてよければ、前衛であろうとした芸術の研究は、他領域の研究よりも、実はかなり保守的なのである。(保守的であるのが悪いわけではない。)

そういった研究の事情を鑑み、本書では幾つかの作品の解釈に踏み込んである。もちろん、それを可能にしたのは、分析対象そのものが、いわゆるアヴァンギャルドと目される混乱の様相を呈していないテクストであつたこと、さらに著者が「オリエンタリズム」II「地政学」という解釈の枠組み(「いま」「ここ」性)を所有していたことにもあるだろう。だが、第III部における「砂の女」に関する分析などは、より同時代の問題に開かれた解釈を持ちつつ、作品を評価する人々の政治的力学をも分析の対象に入れていく。ここをアヴァンギャルド研究の新たな方向性として考えてゆくべきではない

かと、本書を読み私は思いを新たにしたい。我々は、同時代評価や先行文献に対する力学を問題にする。それは、後からやってきた者たちの特権であり義務でもあることは、間違いないのだが、その力学を明らかにし、その議論のタームの「歴史性」を突き詰めた(と思われる)時点で、その考察をやめてしまいがちである。しかし、ここでとり残されたものは何か。芸術作品を様々な運動の結節点つまりトポスとして見る側面が強いアヴァンギャルド研究の場合、この問題が投げかける射程はさらに大きい。

アヴァンギャルドにせよ、モダニズムにせよ、我々は、作品そのものを分析対象とする視点を再び意識すべきではないだろうか。もちろん作品への視線は、様々でよい。それぞれの論者が、それぞれの「いま」「ここ」性から視点を有すればよいだろう。複雑な意味作用を生じさせてしまう作品群であるからこそ、他のジャンルの芸術同様、作家や歴史的位置からではない批評が必要なのである。その先に、我々の論理枠を完全に無効にしてしまうような強度を見出すことが可

能なのかはわからない。わからないが、必要な仕事ではある。

著者も述べている様に、この書は、第III部に相当する戦後のアヴァンギャルド、特に安部公房の評価をめぐると問題から遡及的に深められた考察である。個人的には、安部文学の評価をめぐると問題を素描した後、その評価軸が形成される過程を求め過去に遡つてゆく展開の方が、クロノジックな感覚をも「越境」出来る可能性を感じるのだが、これは好みの問題であらう。

いずれにせよ、「前衛」と「越境」、これは魅力的なテーマである。本書をきっかけとして、我々も更なる「越境」の可能性を模索してゆきたい誘惑に駆られる。(二〇〇五年七月、NTT出版、本体価格三三〇〇円)